
キラルーガ・ガールラッキー

伊藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キラルーガ・ガールラッキー

【Nコード】

N0324J

【作者名】

伊藤

【あらすじ】

キラキラガール！

ありがちなケータイ小説です。

四月中旬の自己紹介

それなりの母親から生まれて

それなりに育って

それなりの努力をして高校に入ったら、中学のときの友達がみんな違うクラスだった。

運命なんて、たとえばそんなことで、簡単に狂う。

入学式のすぐあとにクラスに集められて、あたしたちは自己紹介をした。

あたしの自己紹介は、つまらなかった。

だってあたし、つまらない人間だもの。

クラス全員の自己紹介がつまらなかった。

だって、人間ってつまらないんだもの。

あたしの周りの席の人間は、あたしに全く興味がなかった。

そして、そのひとたちは、どうやら中学のときの友達みたいだった。

違うクラスの、あたしの中学のときからの友達は、あたしが風邪で

休んだ日に、勝手に部活を決めた。

一応あたしも誘われた。

無理だと思って断った。

それがあたしの4月中旬。

愛とかいらなし

すぐに、学校に行くのが嫌になった。
でも、家にいるのはもっと嫌だった。
そんなことしたら、お母さんに心配される。
心配されるのは嫌いだ。凹むから。

あたしは、家を出て、学校の途中にあるローソンで30分雑誌を読んで、もつと先にあるセブンで30分雑誌を読んで、家に帰った。

すっごい静かだった。
お弁当のにおいがした。

昨日、お母さんのケータイを勝手にいじって、学校の番号を着信拒否してみた。

自分のケータイから学校に連絡した。

電話に出た教頭は言った。

つらそうですね、お大事に。

余計なお世話だ、死ねハゲ。

明日は、電話しなくても勝手に風邪だと思ってくれるかな。

ハゲが、余計なこと心配しなきゃいいんだ。

ハゲも、お母さんも。

そんなことはあたしの負担にしかないんだ。

あたしは、ビオレのふくだけコットンで乱暴に顔をぬぐって、ベッドに倒れこんだ。

お弁当食べなきゃ。

マジありがた迷惑。

四月につまづく

その次の朝も、あたしはローソンで30分過ごした。

ローソンについた時点では、ちょっと学校に行く気だった。でも無理だった。

電話もしなかった。

これ以上疲れたら死ぬと思った。

あたしは、同じ制服の流れに沿って、セブンに向かった。中学のときの友達の、後姿を見かけた。

だから、セブンを通り過ぎて、裏道に曲がった。角を3つ過ぎて、またローソンに入る。

店員は、さっきと同じ声でいらっしやいませ、と言った。うるさい黙れ。

あたしに気がつくな。

雑誌のコーナーで、同じ制服の子が貧乏ゆすりをしていた。かかとをつぶした革靴。

ひどいプリン頭。

重そうなつけまつげ。

無いに等しいの下がつてる感じが伝わる眉毛。

見たことがある。

同じクラスの、何とかシズカだ…！

やばいじゃん。

見つかったりチクられたりしたらやばい。

クラスの女たちにあたしが風邪じゃないってバレる。

いや、たぶんもうばれてるんだけど。

どう考えてもめんどくさい。
あたしは、そつとその場を立ち去ろうとして、盛大にコケた。

大丈夫だから滅べ

「ちょっとー、だいじょぶー？」

何とかシズカは、半笑いで駆け寄ってきた。

あと、店員も。

「お客様、大丈夫ですか？」

やだもうマジやだ消えたい、地球滅べと思った。

あたしは、何も言わずに走って逃げようとしてまたコケた。

何とかシズカは、かすれた声で少し笑った。

下がった眉毛がますます下がった。

店員がつられて笑った。

何もかもいまいまいかった。

あたしは、大丈夫です、とだけ言った。

「はぁー？なにー？」

何とかシズカには聞き取れなかったみたいだった。

ていうか、はぁ？の言い方が超こわい。

あたしは、どもりながら大丈夫です、と繰り返した。地球滅べ。

「だいじょぶじゃなくね？血イ出てるし」

何とかシズカは、けらけら笑いながら、ポケットに手を入れた。

あたしは

「いやだいじょぶですマジだいじょぶです」

と囁みながら言った。

そしたら、何とかシズカは、ポケットからよれたティッシュを出した。

「あげる。」
「らない。」

ティッシュはテレクラのティッシュだった。
なんか生々しい怖い。

感謝の言葉に心が無いとき

「はあ…ありがとうございます…」
一応お礼言った。

「気にすんな！」

何とかシズカに肩をたたかれた。
上から視線むかつく。

立ち上がって店を出た。

店員がレジに戻った。

何とかシズカがすぐあとからついてきた。

あたしは、学校のほうに歩き出した。

何とかシズカも、同じほうにくる。

5 m後ろを、ずっとついてくる。

あたしは話しかけない。

向こうも話しかけてこない。

マジ気まずい地球滅べ。

学校についてしまった。

下駄箱で、あたしは先手を打った。

「さっきは本当ありがとう…同じクラス…だよ…シズカさん…」
自分の言い方が気持ち悪い。

あと、シズカさんてなに。下の名前さん付けとか、生まれてはじめてしたし。

「あつまじー？アタシのこと知ってたんだ！名前とか！覚えてくれてありがとう！アタシほんとんど学校きてないからさー。」
予想外にフレンドリー。

だるい。
死ぬ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0324j/>

キラルーガ・ガールラッキー

2011年11月15日05時50分発行